

# 古サルデーニャ語における Differential Object Marking

－類型論と文法化の観点から－

金澤雄介

An Analysis of Differential Object Marking in Old Sardinian

— From the Perspective of Typology and Grammaticalization —

Yusuke KANAZAWA

キーワード：Differential Object Marking, 類型論, 情報構造, 文法化

## 1 はじめに

サルデーニャ語では、特定の文法的特徴を持つ直接目的語が前置詞 *a*（母音で始まる語の前では *ad*）によってマークされるという現象が観察される。このような現象は Differential Object Marking（以下 DOM）と呼ばれる (Bossong 1991)。

ロマンス諸語における DOM に関する研究は、Rohlf's (1972), Bossong (1991), Pensado (1995), Aissen (2002), Escandell-Vidal (2009), Dalrymple and Nikolaeva (2011) など多数存在する。これまでの研究において、直接目的語に DOM が適用される条件として、ふたつの要素が関与していることが明らかになっている。ひとつは直接目的語の意味的特徴である。すなわち前置詞は有生または定によって特徴づけられる直接目的語に付加される傾向にある。前置詞の付加に関与的であるもうひとつの要因として、情報構造がある。すなわち当該の直接目的語が文のトピックとしての性質を帯びる場合、前置詞が付加される。

Putzu (2008) は、古サルデーニャ語文献 *Condaghe di San Pietro di Silki*（以下 CSPS）<sup>1)</sup> における DOM の出現について、直接目的語の意味的特徴の観点から考察している。しかしながら、古サルデーニャ語における DOM の出現について情報構造の観点から考察した体系的な研究はない。本稿の目的は、CSPS における DOM が適用される条件について、情報構造、ならびに情報構造と意味的特徴のかかわりの観点から記述することである。そして古サルデーニャ語における DOM は類型論的に、目的語の意味的特徴と情報構造の両方が関与している「混合タイプ」であることを示す。具体的には、目的語がトピック性を持っていれば、その意味的特徴にかかわらず DOM は適用される。一方、目的語が人間を表す場合、それがトピック性を持つか否かに

関わらず、DOM は義務的に適用されると結論づける。

また本稿では、「混合タイプ」は通言語的に広く観察されることを、同様のタイプに属するバンツァ諸語の事例と対照させることで確認する。さらにこのようなタイプの歴史的な由来について、DOM の機能の文法化の観点から考察する。具体的には、古サルデーニャ語における DOM は、トピック性を持つ目的語のみをマークする機能から、トピックと解釈される可能性が高い意味的特徴を持つ目的語をマークする機能へと再解釈される過程にあることを示す。

## 2 DOM の適用に関与する 2 つの要素

本節では、先行研究の記述にしたがい、DOM の適用に関与する 2 つの要素である、直接目的語の意味的特徴と情報構造について概観する。

### 2.1 意味的特徴

すでに述べたように、DOM の適用に関与的な条件のひとつに、直接目的語の意味的特徴がある。具体的に言えば、直接目的語が有生性の階層および定性の階層においてより上位に位置づけられるとき、DOM の適用をより受けやすくなる。有生性の階層、および定性の階層はそれぞれ図 1、図 2 の通りである (Aissen 2002: 437, Dalrymple and Nikolaeva 2011: 4)。階層の左に位置する素性によって特徴づけられる目的語が、より DOM の適用を受けやすい。

人間 > 有生 > 無生物

図 1 : 有生性の階層

人称代名詞 > 固有名詞 > 定名詞句 >

不定の特定されている名詞句 > 特定されていない名詞句

図 2 : 定性の階層

### 2.2 情報構造 — 特に Aboutness Topic について

DOM の適用に関与しているもうひとつの要素が、情報構造すなわち目的語のトピック性である。Bossong (1991) をはじめとするいくつかの先行研究で明らかにされているように、当該の目的語が文のトピックの役割を持っていれば、DOM が適用される。

ここで、本稿で用いるトピックの定義について述べる。伝統的な見方におけるトピックは、話し手と聞き手の間で既知の要素、あるいはすでに文脈に現れている要素と定義される。実際、CSPS においても既知の目的語 (旧情報) には DOM が適用される。しかしながら Lambrecht

(1994), Escandell-Vidal (2009) など近年の研究では、トピックを別の定義、「その文がテーマとしているもの (what the sentence is about)」としてとらえようとしている (Lambrecht 1994: 118)。この定義では、トピックとはその文の興味・関心の中心と位置付けることができる。また Lambrecht (1994: 131) はトピックを「アバウトネス (Aboutness)」という観点と結びつけて、以下のように定義している。

“A referent is interpreted as the topic of a proposition if in a given situation the proposition is construed as being about this referent, i.e. as expressing information which is relevant to and which increases addressee’s knowledge of this referent.”

「その文脈において、文がある対象について言及している（例えば対象に関係のある情報を表したり、あるいは対象についての聞き手の知識を増やしたりする）のであれば、ある対象というのはその文のトピックである。」

この定義で着目すべき部分は、対象について新たな情報（コメント）の追加がおこなわれる場合、その対象はトピックとみなされるという点である。したがって、先行する文脈に現れていない新しい要素（新情報）であっても、その文で新たな情報が付け加えられているのであれば、トピックになることができると考えられる。同様の見方は Escandell-Vidal (2009: 853) にも見られる。そこでは、新たに導入された要素であっても、トピックになることができ、旧情報であることはトピックになるための必要条件ではないと述べられている。

以上に述べてきたことをまとめると、「アバウトネス」の観点から見たトピックは、次のような性質を持つといえる。

- ・その文の興味・関心の中心となる要素である
- ・その文脈、あるいは後続の文脈において、新たな情報（コメント）が付け加えられる
- ・旧情報であるか否かは問われない

本稿では、以上の性質を持つ要素を Aboutness Topic<sup>2)</sup> とする。Aboutness Topic の定義では、先行する文脈に現れていない要素であっても、それについての新たな情報が加えられるのであれば、トピックと解釈される。この見方が、旧情報や親近性という観点に基づく伝統的なトピックの定義と大きく異なる点である。

### 3 意味的特徴に基づく DOM

本節では、古サルデーニャ語文献 CSPS における DOM の適用について、目的語の意味的特徴の観点から考察する。

まず、DOM と目的語の有生性の相関について観察する。DOM は、直接目的語が人間を表す固有名詞 (1)、あるいは人間を表す普通名詞 (2) のときに義務的に適用される。

- (1) *e fekerun .iiij. fīios, a Maria, et a Gauini, et a Justa,*  
 and made 4 sons DOM M. and DOM G. and DOM J.  
*et a cCaterini.* (CSPS: 27)  
 and DOM C.

「そして彼らは4人の子ども、Maria, Gauini, Justa, Caterini を授かった」

- (2) *Posit donikellu<sup>3</sup> Ithoccor a scu. Petru a fiu de Forasticu Thinga,*  
 donated d. I. to St.P. DOM son of F. T.  
*cun parthone sua.* (CSPS: 55)  
 with land his

「Ithoccor 氏は聖 Petru に Forasticu Thinga の息子を彼の土地とともに寄進した」

これに対して Putzu (2008: 415) も述べているように、動物を表す普通名詞、無生物の名詞には DOM は観察されない。例えば (3) では、torrai の直接目的語 *su boe* 「雄牛」に *a* は付加されない。また (4) では、torrai の直接目的語 *uerbu* 「言葉」にやはり *a* は付加されない。

- (3) *Et ego fekinde canpania cun ille, cun boluntate dessa donna mea,*  
 and I made-cl.<sup>4</sup> company with him with will of-the Ms. my  
*donna Massimilla, e torraili su uoe.* (CSPS: 229)  
 Ms. M. and returned-him the ox

「そして私は私の主である Massimilla 氏の意志により、彼に同意した。そして私は彼にその牛を返した」

- (4) *et ego torraili uerbu ca non bi auiat parte.* (CSPS: 3)  
 and I returned-him word that not cl. had part

「そして私は彼に、彼はその分け前を持っていないと答えた」

次に、DOM と定性の相関について観察する。DOM は、直接目的語が強勢人称代名詞のときに適用される。(5)では、強勢の人称代名詞 3 人称単数女性形の *issa* に *ad* が付加されている。文脈から判断してこの *issa* は、*fetu de Jorgia Manca* 「Jorgia Manca の子ども」を指示していると考えられる。

- (5) *Ego prebiteru Elias, ki ponio in ecustu condake de scu Petru de Silki,*  
 I bishop E. who write in this condaghe of St. P. de S.  
*pro fetu de Jorgia Manca ca la leuarat a llarga Gosantine Tusu,*  
 for son of J. M. because her had deprived of G. T.  
*seruu de Nicola Regitanu, e fekitiui .iiij. fijos; et osca tenninde corona*  
 slave of N. R. and made-cl. 4 sons and then had-cl. court  
*cun sardos, cun ken la aueat ad issa scu. Petru in corona*  
 with Sardinians with whom her had DOM she St. P. in court  
*de iudike in Kitarone* (CSPS: 28)  
 of Giudice in K.

「私 Elias 祭司は、Jorgia Manca の子どもについて聖 Petru de Silki のこのコンダージェに記録する。彼は Nicola Regitanu の奴隷である Gosantine Tusu に奪われ、4 人の子どもを作った。その後、私は聖 Petru とともに彼女を所有していたサルデーニャ人たちを、Kitarone 王の法廷において訴えた」

Putzu (2008: 413)によると、CSPS では複数形の人間名詞に DOM が適用される事例が顕著であるという。またそれらの名詞には、所有を表す修飾句がともなうことも指摘している。例えば(6)では複数形 *ffijos* 「息子たち」には、その所有者である *Istefane de Istefane de Nussas e de Maria de Funtana* が後続している。

- (6) *Ego prebiteru Petru Iscarpis, ki parthibi cun prebiteru Gauini Pithale*  
 I bishop P. I. who divided with bishop G. P.  
***a ffijos de Istefane de Nussas e de Maria de Funtana,***  
 DOM sons of I. de N. and of M. of F.  
*ki furun de scu. Petru de Silki, e de scu. Petru de Carieke.* (CSPS: 24)  
 who were of St. P. de S. and of St. P. of C.

「私 Petru Iscarpis 祭司は、Gauini Pithale 祭司と Istefane de Nussas と Maria de Funtana の息子たちを分け合った。その息子たちは聖 Petru de Silki と聖 Petru de Carieke のものであった」

Putzu (2008: 413-414) も指摘しているように、所有者を表す語句がともなえば、被所有名詞の定性が高くなると考えられる<sup>5)</sup>。これに対して(7)のように、所有を表す語句をともなわない複数形の人間名詞には、DOM は観察されない。

- (7) *Andaitiui Janne Cuccu kinke fuit mandatore, e bocaitindela, a mama went-cl. J. C. who-cl. was mandatore and took-cl.her DOM mother e **fios**; et osca pettitinolla, e deimuslila, e non bi fekit **fios**, and sons and then asked-us-her and gave-him-her and not cl. made sons e si est mortu Migali. (CSPS: 298) and refl.<sup>6)</sup> is died M.*

「役人の Janne Cuccu はそこに行き、母親と息子たちを取り戻した。その後、彼は結婚を申し込んだので私たちは彼女を彼に与えた。しかし彼は子どもを作らず、Migali は亡くなった」

以上に示したように、古サルデーニャ語における DOM の適用には、目的語の意味的特徴、すなわち有生性と定性が関与していることがわかる。しかしながら、これらの例における DOM が純粹に意味的特徴が要因となって現れていると断言することはできない。すなわち、目的語のトピック性が引き金となって DOM が現れている可能性もある。そこで以下では、DOM が純粹に意味的特徴によって適用されている事例、すなわち非トピックの目的語に現れる事例を示す。

(8)では、*patre tuonde*<sup>7)</sup>「あなたの父親」に *a* が付加されている。この句は本来の統語的位置から文頭に移動している。サルデーニャ語では、文頭に移動した要素が、主節においてクリティックによって指示されている場合、その目的語はトピックと解釈される (Jones 2003: 327, Kanazawa 2014: 92)。しかしながら(8)では、この目的語を指示するクリティックは主節の中に現れない。この場合、文頭に移動した要素はトピックではなくフォーカスと解釈される (Jones 2003: 347, Ledgeway 2011: 430)。すなわち、*patre tuonde* は非トピック要素である。

- (8) *Et ego kertaili ca <a patre tuonde uinkeran in su patre and I objected-him that DOM father your-cl. had won in the father de Petru Corsu>. (CSPS: 103) of P. C.*

「私は彼に『彼らは Petru Corsu の父親についての訴訟で、あなたの父親に勝訴した』と反論した」

同様の現象は、人間を表す固有名詞にも見られる。(9)では、Mikine は文頭に移動しているが、

クリティックによる繰り返しはない。したがって Mikine はフォーカス要素であり、トピックではない。

- (9) *et a Mikine leuait sca. Nastasia, e Justa remasit ad in cumone.*  
 and DOM M. took St. N. and J. remained to in common  
 (CSPS: 39)

「そして聖 Nastasia は Mikine を引き取り、Justa は共同で所有されることになった」

(8)と(9)から、当該の目的語が人間を表す場合、たとえそれがトピック性を持っていないとしても、DOM が適用されることがわかる。ここまでの考察は、DOM の出現規則 (a) として以下のようによまとめることができる。

DOM の出現規則 (a)：人間を表す名詞では、トピックであるか否かにかかわらず、DOM は義務的に適用される。

#### 4 トピック性に基づく DOM の付加

前節では、DOM の適用が目的語の意味的特徴に依存していることを示した。これに加えて、冒頭でも述べたように、DOM は情報構造とも深く関連している。本節では、情報構造の立場から見た DOM の出現について考察を試みる。古サルデーニャ語における DOM は、当該の目的語がトピックとしての性質を持つ場合に適用される。目的語がトピック性を持つか否かを判断する基準として、左方移動がある。左方移動とは、ある要素が主節の左端の外側に移動し、かつそれが主節におけるクリティックによって繰り返される現象を指す。前節の(8)と(9)の分析に際して少し触れたように、左方移動をこうむった目的語は、文のトピックと解釈される。

たとえば(10)では、leuait の目的語 Justa, Bona, Elene... は文頭に移動し、クリティック los による同一指示を受けている。加えてこれらの目的語は前置詞 a をともなっていることから、左方移動を受けたトピック要素であると解釈することができる。

- (10) *A Justa, et a Bona, et ad Elene, leuaitilos scu. Petru de Silki;*  
 DOM J. and DOM B. and DOM E. took-them St. P. of S.  
*et a Migali, et a Petronella, et a Barbara, et a Petru*  
 and DOM M. and DOM P. and DOM B. and DOM P.

*leuaitilos scu. Petru de Carieke.* (CSPS: 24)

took-them St. P. of C.

「Justa, Bona, Elene は聖 Petru de Silki が引き取り, Migali, Petronella, Barbara, Petru は聖 Petru de Carieke が引き取った」

(11)では、左方移動をこうむった無生物名詞 *kertu* に *a* が付加されている。3節の(3)と(4)で、意味的特徴の観点からは、無生物名詞には DOM は適用されないことを示した。したがってこの場合の DOM の出現は、目的語のトピック性に起因するものといえる。

(11) *Et ad kertu cale minde fekit inde lu vinchy.* (CSPS: 438)

and DOM suit which me-cl. made cl. it won

「そして彼が私に起こした訴訟では、私が勝った」

古サルデーニャ語では、左方移動をこうむらず、本来の統語的位置にある目的語にも DOM が観察される。(12)では、無生物名詞 *destimonios* と *ccarta* が *a* をともなっている。したがってこれらの無生物名詞はトピックと解釈する必要がある。

(12) *Judicarunilis ad issos a destimonios et a ccarta ca fuit issoro intrega*

judged-them to them DOM testimonies and DOM document that was their slave

*sa mama de Inbenia, e non potterun auer nen carta, nen destimonios*

the mother of I. and not could have nor document nor testimonies

(CSPS: 46)

「彼らは彼らに、Inbenia の母親は彼らの完全奴隷であることを示す証拠と文書を持ってくるように命じた。しかし彼らは文書も証拠も持っているはずがなかった」

*destimonios* と *carta* は先行の文脈には現れない、新しい要素である。これらの目的語がトピックと解釈できることを示すために、2節で述べた、Aboutness Topic の見方を導入する。以下に Aboutness Topic の定義を再掲する：その文の興味・関心の中心となる要素である／その文脈、あるいは後続の文脈において、新たな情報（コメント）が付け加えられる／旧情報であるか否かは問われない。

例文に戻ると、2つの無生物名詞は、後半の文で引き続き現れていることがわかる (non potterun auer nen carta, nen destimonios)。つまり、「彼らは文書も証拠も持っているはずがなかった」という新たな情報が付け加えられ、*carta* と *destimonios* が興味・関心の中心に置かれ



ていると考えられる。よってこの文において2つの無生物名詞は Aboutness Topic であるといえる。

以上に示したように、古サルデーニャ語では DOM の有無は目的語のトピック性が重要な役割を果たしていることがわかる。ここまでの考察は、DOM の出現規則 (b) として以下のようにまとめることができる。

DOM の出現規則 (b) : その目的語がトピック性を持っていれば、意味的特徴にかかわらず、DOM は適用される。

## 5 類型論の観点から

3節と4節では、古サルデーニャ語における DOM が出現する条件として、意味的特徴と情報構造に基づいた2つの規則にまとめられることを示した。Dalrymple and Nikolaeva (2011: 216) によると、古サルデーニャ語のように、DOM の適用において目的語の意味的特徴と情報構造の両方が関与的である言語は、「混合タイプ」に分類される。混合タイプに属する言語は類型論的に広く観察される。本節では、古サルデーニャ語の DOM と同様の分布を見せるバンツー諸語の例を取り上げ、系統の異なる言語に並行例が観察されることを示す。

Dalrymple and Nikolaeva (2011: 215) によると、DOM のタイプは類型論的に以下の3種類に分けられるという。(iii)の「混合タイプ」はさらに(a)と(b)の2つのタイプに区別される。

- (i) DOM が情報構造にのみ支配される言語 (情報構造依存タイプ)
- (ii) DOM が意味的特徴にのみ支配される言語 (意味的特徴依存タイプ)
- (iii) DOM が情報構造と意味的特徴の両方に支配される言語 (混合タイプ)

(a) DOM が、トピック性を持つ目的語と、特定の意味的特徴を持つ非トピック目的語に付加される言語

(b) DOM が、特定の意味的特徴を持つトピック目的語に付加される言語

古サルデーニャ語は、上記のタイプのうち、(iii)の(a)に分類される。Dalrymple and Nikolaeva (2011: 216) によると、DOM のパターンのうち(iii)がもっとも一般的なタイプであるという。このタイプにはたとえばヒンディー語 (印欧語族)、チャティーノ語 (オトマンゲ語族)、ネネツ語 (ウラル語族) などがあるという<sup>8)</sup>。

Dalrymple and Nikolaeva (2011: 208-209) によると、ニジェール・コンゴ語族のバンツー諸語に属するスワヒリ語では古サルデーニャ語と同じような DOM の分布が観察されるという。つ

まり、有生の目的語には DOM（この場合動詞との一致）は義務的である一方、無生の目的語はトピック性を持つ場合にのみ観察される。さらに(13)に示した Morimoto (2002) の例文に基づき、同じバンツァ諸語のマクア語 Imithupi 方言では、DOM は非人間クラスでは任意的だが、人間クラスでは、たとえトピックではなくても義務的であると述べている。(13)では、クリティック n は直接目的語 mpáni「誰」と一致している。この目的語は疑問詞であることから、フォーカス要素であると考えられるが、接辞 n は義務的である。これは、3節の(9)と(10)で示した古サルデーニャ語の事例とまったく平行的な現象としてとらえられる。

- (13) Aráárima a-n-líh-ire / \*a-líh-ire mpáni?  
 A. cl-cl.feed-Tense/Aspect cl.feed-Tense/Aspect who  
 「Araarima は誰を養った？」

以上に示したように、古サルデーニャ語に見られるような、DOM の適用における「混合タイプ」は、系統的に異なる言語にも観察される。では、このような DOM のタイプはどのような過程を経て獲得されるのだろうか。次節では、通時の変化、すなわち文法化の観点から、古サルデーニャ語の DOM の適用規則の成立過程について簡潔な考察を試みる。

## 6 文法化の観点から

Dalrymple and Nikolaeva (2011: 18, 194) は、前節で述べた (iii) の「混合タイプ」は、文法化によって得られたものであると主張している。この見方によれば、DOM は本来、語用論的な特徴、つまりトピック性を持つ目的語をマークする機能を持っていた。その後、DOM の機能の再解釈によって、特定の意味的特徴を持つ直接目的語の格標識として機能するようになったという。本節では、古サルデーニャ語における DOM の機能の通時の変化について、文法化の観点から説明を試みる。

Dalrymple and Nikolaeva (2011: 208) によると、本来トピック性を持つ目的語をマークしていた DOM が、トピック性を持たない、特定の意味的特徴を持つ目的語の格標識に変化したことは、DOM の適用範囲の「拡大」によるものであるという。すなわち、もともとはトピック性のみをマークしていた DOM が、トピックと解釈される可能性が高い意味的特徴を持つ目的語、つまり人間を表す名詞にまでその適用範囲を拡大させた。Dalrymple and Nikolaeva (2011: 208) によると、文法化がさらに進行すると DOM と情報構造の関係は完全に失われる。そして DOM の有無はもっぱら目的語の意味的特徴に依存することになり、その結果「意味的特徴依存タイプ」にいたるという。一方「混合タイプ」は、DOM の適用において意味的特徴にも依存する一方、

情報構造にも依存している。したがって「混合タイプ」は、「情報構造依存タイプ」から「意味的特徴依存タイプ」への文法化の中途段階にあるといえる。「情報構造依存タイプ」から「混合タイプ」にいたるまでの文法化の過程は、図3のように図式化できる。

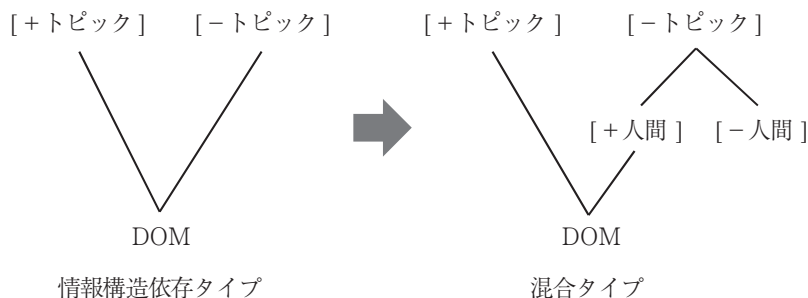


図3：文法化にともなう DOM の適用範囲の「拡大」

図3のような文法化をこうむった言語として、スペイン語がある。Escandell-Vidal (2009: 871) は、中世スペイン語では、「情報構造依存タイプ」であったと述べている。その根拠として、El Cantar de mio Cid<sup>9)</sup> から以下のような例を挙げている。(14a)の las fijas「娘たち」は、人間を表す名詞であるがトピック性を持たないため前置詞 a は付加されない。一方、(14b)の las sus fijas はトピックであることが、左方移動をこうむっていることから推定できる。この目的語のトピック性をマークするため、前置詞 a が付加されていると考えられる<sup>10)</sup>。

(14) (a) Escarniremos **las fijas** del Campeador. (Cid 2251)

「私たちは Campeador の娘たちをあざ笑うだろう」

(b) **A las sus fijas** en braço las prendia. (Cid 275)「彼の娘たちは、彼が腕に抱いていた」

一方現代スペイン語では、人間を表す名詞については、トピック性の有無にかかわらず DOM は原則的に付加される<sup>11)</sup>。ただし、DOM の適用がトピック性と完全に無関係になったわけではない。例えば(15a, b)はいずれも「フアンは虎を殺した」という意味であるが、非人間名詞かつ不定冠詞 un をともなう un tigre がトピックの解釈をともなう場合は前置詞 a が付加されるが、非トピックである場合は a は現れないという(Laca 1995: 82)。したがって現代スペイン語は「混合タイプ」に属するといえる。

(15) (a) Juan mató **a un tigre**.

(b) Juan mató **un tigre**.

以上の分析からスペイン語は DOM の適用に関して, Laca (1995: 88-89) も指摘しているように, 「情報構造依存タイプ」から「意味的特徴依存タイプ」への文法化の中途段階にあるといえる。

ではここでサルデーニャ語の DOM に立ち戻る。3 節と 4 節で示したように, 古サルデーニャ語では目的語が人間を表す場合, たとえそれが非トピック要素であっても DOM は適用される。また目的語がトピックであるとき, その意味的特徴にかかわらず, DOM は適用される。このような DOM の適用規則は, 上で示した中世スペイン語のそれと同じである。以下では, サルデーニャ語の DOM の機能の変化を, 図 3 で示した文法化の過程に位置づけて説明することを試みる。

古サルデーニャ語のより古い段階において, DOM が「情報構造依存タイプ」であったということを示す直接的な根拠は確認できない。しかしながら, 本稿では以下に示す 2 つの根拠によって, 古サルデーニャ語は図 3 で示したような文法化をこうむったと考えたい。ひとつは先ほど示したスペイン語の並行例である。ロマンス諸語の中でも, サルデーニャ語とスペイン語の間には様々な共通の変化が観察される。スペイン語で生じた変化が, サルデーニャ語でも生じたと考えることは不可能ではない。もうひとつの根拠は Pensado (1995: 201) が指摘しているように, 古典ラテン語では前置詞 *ad* はトピックマーカ―としての機能を有しており, 情報構造に関連した用法を持っていたと推定されることである。例えば (16a) では人間名詞 *Dolabella* が, (16b) では無生物名詞 *ea autem...* がそれぞれ左方移動をこうむり, その上 *ad* をともなうことで, トピックであることが示されている<sup>12)</sup>。このように, ラテン語では前置詞 *ad* がトピックを表示する機能を持っていたことを考慮に入れると, 古サルデーニャ語の DOM は, 本来トピック性を示す機能を持っていた *ad* が文法化したことに由来すると考えることができる<sup>13)</sup>。

(16) (a) *ad Dolabellam, ut scribis, ita puto faciendum* (13, 10, 2)

「*Dolabella* については, あなたが私に書くように, そのようにしなければならないと思う」

(b) *ad ea autem, quae scribis de testamento, videbis, quid et quomodo* (11, 21, 1)

「あなたが文書に書くことについては, あなたはそれが何でどのようなものか分かるだろう」

## 7 まとめ

本稿では, CSPA を資料として, 古サルデーニャ語における DOM が適用される条件について, 情報構造, ならびに情報構造と意味的特徴のかかわりの観点から記述することを試みた。考察の結果, DOM の適用条件は, 次の (a), (b) にまとめることができる。

- (a) 人間を表す名詞では、トピックであるか否かにかかわらず、DOM は義務的に適用される。
- (b) その目的語がトピック性を持っていれば、意味的特徴にかかわらず、DOM は適用される。

また本稿では、古サルデーニャ語に見られる DOM の適用規則は類型論的に広く観察されることを示した。加えて、DOM における「混合タイプ」は、「情報構造依存タイプ」から、「意味的構造依存タイプ」への文法化の中間段階に位置づけられることを示した。

本稿で扱うことのできなかった問題として、古サルデーニャ語から現代サルデーニャ語にいたるまでの DOM の文法化のプロセスがある。現代サルデーニャ語の DOM のシステムについては、Bossong (1982) および Jones (1995, 2003) に詳細な記述がある。Jones の記述を踏まえ、サルデーニャ語における DOM の通史について考察をすることが今後の課題である。

#### 註

- 1) *Condaghe di San Pietro di Silki* とは、サルデーニャ島北西部、サッサリ (Sassari) 郊外にある San Pietro di Silki 修道院において作成されたコンダゲ (訴訟、土地売買の契約、領土の分配及び画定、財産及び遺産の譲渡、物々交換等に関する記録がなされた公文書の総称) を指し、1073 年から 12 世紀後半にかけて記録されたと推定されている。CSPS は計 443 節という、コンダゲの中で最も大部からなる。ゆえに極めて多くの資料を提供し、当時の言語状態はもとより、生活、社会構造などを知る上でもその価値は高い。現在はサッサリ大学図書館に所蔵されている。本稿では Soddu and Strinna (2013) の校訂本を使用する。
- 2) Aboutness Topic という用語そのものは Cruschina (2011) に見られる。その定義としては、すでに示した Lambrecht (1994) と同じように、“what the sentence is about” とされている。
- 3) *donnikellu* とは、王の家族に与えられる称号である。
- 4) 例文に付したグロスにおける “cl.” は、副詞的クリティックを意味する。冗語的に用いられているものが多い。
- 5) Lyons (1999: 23) にも、「名詞 (句) が所有を表す語句を伴うと、定性を得る」という記述がある。しかし (i) のように、CSPS には所有を表す語句を伴うが、DOM は観察されないという反例も観察される。DOM と定性の関係についての詳しい分析については、稿を改めて論じたい。  
(i) *Et parthiuimus sos fijos de Furata Melone et de Comita de Piras* (CSPS: 15)  
and divided the sons of F. M. and of C. of P.  
「そして我々は Furata Melone と Comita de Piras の息子たちを分けあった」
- 6) 例文に付したグロスにおける “refl.” は、再帰代名詞を意味する。
- 7) *tuonde* は、クリティック *inde* が所有代名詞 *tuo* に接合した形である。
- 8) (i) の「情報構造依存タイプ」には、オスチャーク語やマンシ語 (いずれもウラル語族) などが分類される。(ii) の「意味的特徴依存タイプ」にはヘブライ語 (アフロ・アジア語族)、インバブラ・ケチュア語 (ケチュア語族)、イデン語 (パマ・ニュンガン語族) などが含まれるという (Dalrymple and Nikolaeva 2011: 215)。
- 9) 12 世紀後半から 1207 年の間に書かれたとされる叙事詩である。
- 10) (14) の例文は、Laca (2006) からの引用である。
- 11) ただし人間を表す名詞の複数形における DOM の適用については、別の規則がある (Leonetti 2004)。紙幅の都合上、ここではその詳細には立ち入らない。
- 12) (16) はいずれもキケローによる『アッティクスへの手紙』からの引用である。

- 13) このような文法化の過程は、系統的に異なる言語にも観察される。例えばハンガリー語は、情報構造依存タイプから意味特徴依存タイプに移行した (Dalrymple and Nikolaeva 2011: 196-198)。

参考文献

- Aissen, Judith (2003): "Differential Object Marking: Iconicity vs. Economy. in: *Natural Language and Linguistic Theory*. 21/3. pp.435-483.
- Bossong, Georg (1982): "Der präpositionale Akkusativ im Sardischen" in: *Festschrift Johannes Hubschmid zum 65. Geburtstag*. Bern; Francke. pp.579-599.
- . (1991): "Differential object marking in Romance and beyond" in: Wanner, Dieter and Kibbee, Douglas (eds.) *New analyses in Romance linguistics: selected papers from the XVIII Linguistic Symposium on Romance Languages, Urbana-Champaign, April 7-9, 1988*. Amsterdam: John Benjamins. pp.143-170.
- Cruschina, Silvio (2011): *Discourse-Related Features and Functional Projections*. Oxford: Oxford U. P.
- Dalrymple, Maria and Nikolaeva, Irina (2011): *Objects and Information Structure*. Cambridge: Cambridge U.P.
- Escandell-Vidal, Victoria (2009): "Differential object marking and topicality. The case of Balearic Catalan" in: *Studies in Language*. 33/4. pp. 832-885.
- Jones, Michael Allan (1995): "The prepositional accusative in Sardinian: its distribution and syntactic repercussions" in: M. Maiden and J. C. Smith (eds.) *The Romance Languages and Current Linguistic Theory*. Amsterdam: John Benjamins. pp. 37-75.
- . (2003): *Sintassi della lingua sarda*. Condaghes: Cagliari.
- Kanazawa, Yusuke (2014): "A preliminary Study on the Position of Clitics in Old Sardinian." in 『滋賀短期大学研究紀要』 39. pp.87-100.
- Laca, Brenda (1995): "Sobre el uso del acusativo preposicional en español" in: Pensado, Carmen (ed.) *El Complemento directo preposicional*. Madrid: Visor Libros. pp.61-91.
- . (2006): "El objeto directo" in: Concepción Company (ed.) *Sintaxis histórica del español. Vol. 1: La frase verbal*. México: Fondo de Cultura. (筆者未見)
- Lambrecht, Knud (1994): *Information structure and sentence form*. Cambridge: Cambridge U.P.
- Ledgeway, Adam (2011): "Syntactic and morphosyntactic typology and change" in: M. Maiden, et al. (eds.) *The Cambridge history of Romance languages Vol. I Structures*. Cambridge: Cambridge U. P. pp.382-471.
- Leonetti, Manuel (2004): "Specificity and Differential Object Marking in Spanish" in: *Catalan Journal of Linguistics*. 3. pp.75-114.
- Lyons, Christopher (1999): *Definiteness*. Cambridge: Cambridge U.P.
- Morimoto, Yukiko (2002): "Prominence Mismatches and Differential Object Marking in Bantu." in: Butt, Miriam and King, Tracy Holloway (eds.) *On-line Proceedings of the LFG 2002 Conference*.
- Pensado, Carmen (1995): "La creación del complemento directo preposicional y la flexión de los pronombres personales en las lenguas románicas." in: Pensado, Carmen (ed.) *El Complemento directo preposicional*. Madrid: Visor Libros. pp.179-233.
- Putzu, Ignazio (2008): "Per uno studio dell'accusativo preposizionale in sardo antico: emergenze dallo spoglio del Condaghe di San Pietro di Silki" in: Lazzeroni, Romano / Banfi, Emanuele / Bernini, Giuliano / Chini, Marina / Marotta, Giovanna (eds.) *Diachronica et Synchronica. Studi in onore di Anna Giacalone Ramat*. Pisa: Edizioni ETS. pp.397-428.
- Rohlf, Gerhard (1972): "Autour de l'accusatif prepositionnel dans les langues romanes" in: *Revue de Linguistique romane* 35. pp.312-334.
- Soddu, Alessandro and Strinna, Giovanni (eds.) (2013): *Il Condaghe di San Pietro di Silki*. Nuoro: Ilisso.